

スキマ産業失敗者の結末

第11期 山田 彩華

人間関係とは、スキマ産業である。ある人がリーダーならば、同じコミュニティに2人目のリーダーはいらない。そのコミュニティで自分の居場所を見出したければ、役割の「スキマ」を見つけ、その役割を演じるべきであろう。私は、小野ゼミ生活において、このスキマ産業に失敗したのだ。つまり、自分の役割を見いだせず、ゼミに居場所を感じられなかったのである。

11期女子を例にとろう。ぼんちゃんは、大人で、仕事ができる子。蓮岡は、見た目こそギャルだが、研究に誰よりも熱心だ。はるぼんは、天然である。もしも、11期女子がこの3人だけならば、私は、中学・高校と演じてきた、お得意の「優等生」を演じていたであろう。しかし、11期女子には、もう1人いるのだ。そう、小平である。彼女は、私以上に「優等生」であり、しかも、私と違って打算的な優等生ではない。根っからの優等生である。加えて、大分可愛い。完敗である。さらに、11期には、エース立松、プレゼンの伊礼、ディベートの西本、ビジコンの優輝、ゼミ愛に溢れる内藤、人間関係のバランス師住田、スポーツ万能石塚、安定感の和也、そして、オシャレジャケットを着ただけで面白い久米様、という個性豊かな男性陣もいる。同期は皆、何か秀でたところがあり、ゼミに貢献しているのに、私は自分の役割を見つけれず、何もできないと感じ、3年生の6月頃から、私はゼミに不必要な人間ではないかと悩みはじめた。そして、先輩や同期から距離をとるようになり、余計に居場所のなさを感じていた。小野先生がいつだか、ゼミを辞める原因のほとんどが自分の居場所をゼミ内に見いだせなかったことにあるのだろう、と仰っていたが、私も3年の後期には、3年いっぱいゼミを辞めようと考えていた。

そんな私が、ゼミを続けて今、無事に卒業エッセイの執筆に至った背景には、後輩の存在がある。入ゼミ代表という役職を全うする中で、私は、後輩という生き物が好きなのかもしれないと思い始めたのだ。そして、同期に説得されたこともあるが、後輩が入会して何か変わることを期待し、4年の前期までゼミで頑張ると決意したのである。そんな決意の中、迎え入れた12期生は、レポートは出さない、礼儀もなっていない、いわゆるだめな子たちであった。そして、12期生がインカレディベートに苦しむ6月、ついに私は、12期生にプチギレたのである(@六郷土手)。これを機に、私はついに、「後輩を激しく怒る先輩」という役割を得たのである(とはいえ、六郷土手での怒り方はよくなかったと反省している)。六郷土手事変以来、「後輩を激しく怒る先輩」の先輩である菊盛さんの怒り方を観察し、怒る勉強をし始めたのであった。

役割を得てからは、随分ゼミが楽しくなった。今、改めてゼミに残ってよかったと感じている。12期生には、感謝したい。入会してくれてありがとう。1度言ったくらいじゃ直らないダメ(可愛い)後輩でいてくれてありがとう。でも、来年からは怒る立場だから、もっと頑張んなきゃだめだよ!!